令和４年度（2022 年度）洗堰上流の瀬田川における チャネルキャットフィッシュの生息状況

石崎大介・山本充孝

１．目　的

近年、県内において特定外来生物チャネルキャットフィッシュの確認数が増加し、瀬田川洗堰上流の瀬田川（以下、瀬田川上流）や琵琶湖南湖においても生息が確認されている。適切な駆除を行い，琵琶湖への拡散を防止して未然に漁業被害を防ぐため、瀬田川上流における生息状況を把握した。

２．方　法

2022 年 4～10 月に瀬田川上流で毎月延縄調査を実施した。幹縄約 500 m に 60 本の枝針(ハリス：ナイロン 7 号、針：ムツ針 11 号ないし 14 号）を備えた延縄を 5 鉢用いて 1 回の調査で針数 300 本を設置し、翌日引き上げた。エサは冷凍のアユを用いた。調査日ごとに採捕された本種の針 100 本あたりの個体数を算出し CPUE とした。また 2022 年 5～11 月に 30 回、同水域で実施された滋賀県漁業協同組合連合会が実施した針数 300 本の延縄による本種の駆除データについても同様に CPUE を算出した。CPUE の月平均を求め、過年の傾向と比較した。またこれらにより採捕された本種の標準体長を 4～6 月の上期、新たな幼魚が加入する時期である 7～11 月の下期に分けてヒストグラムを作成し過年の傾向と比較した。

３．結　果

4 月の本種の採捕はなく、5 月と 6 月の CPUE はそれぞれ 0.27、0.07 と低かった（図 1)。しかしながら、7 月から 9 月は 0.71～0.73 に上昇し、再び 10 月と 11 月には CPUE は低下した。また採捕された個体は、上期は体長 200 ㎜から 300 ㎜未満の幼魚のみであったが、下期は体長 200 ㎜程度の幼魚に加えて上期には採捕されなかった大型の個体も採捕された。上期は体長から 2020 年生まれと推定され 2021 年の駆除事業では採捕されなかった個体が採捕されたものと考えられ、この傾向は 2020 年の上期にも見られた。一方で下期は当水域で 2021 年に繁殖した幼魚が新たに採捕されるようになったことに加え、上期には存在しなかった大型魚も採捕されるようになった（図 2)。この傾向は 2021 年の下期にも見られており、大型魚は個体数の多い瀬田川下流から侵入してきているものと推察される。このように瀬田川上流水域では上期には前年の採り残しの幼魚が採捕されるが、下期には当水域で繁殖した幼魚の発生や下流域からの新たな親魚の侵入を繰り返しているものと推察される。そのため、駆除事業を継続していく必要があるものと考えられる。

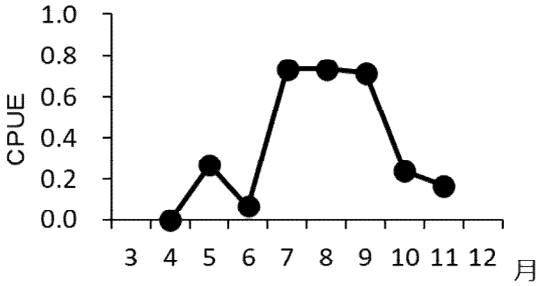

図 1 CPUE の月変化

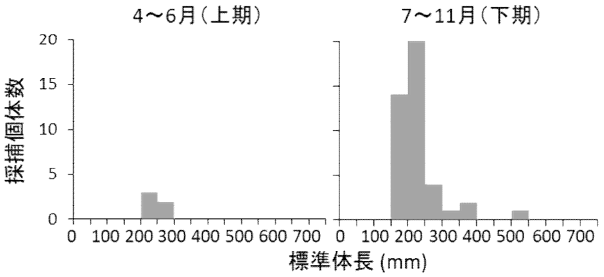

図 2 採捕された個体の体長分布